

東京日々新聞

八百五十一号



洋酒は閑まき  
只獨り飲居る縁あり  
物音ある桐の葉は小倉と見え久しく音信ぬ義弟  
何事ありんか此の先頃遠國にて病死するの報あり  
友愛の情切あり。幻の姿と現せし影の千種の  
中、消虫の音とありを残りけし

薄々堂主人録

秋暑き庭面掃て打水。濡瓦草樹の露の玉葉未と傳ふ  
音絶て消る疾き光景と見たり思ひ會者定離と  
自ら感ず。愁情の替と聊に散さんとして  
籠る書室より  
至来し

一蕙齋芳幾

驗具足屋

ホクエ

